

第 65 回コルモス研究会議に参加

金子 昭

2018年12月26日・27日の両日、京都のANAクラウンプラザホテルで開催された標記の研究会議に参加した。コルモスとは「現代における宗教の役割研究会」(Conference on Religion and Modern Society)の頭文字CORMOSの略称である。同会議は、現代社会の分析と把握を通じて、宗教はいかにあるべきかという課題を、宗教者及び宗教研究者が一堂に会して討議する研究会議である。これまで46年間開催されてきたが(初期は年2回開催であった)、今回は約70名の宗教者や宗教研究者が参加した。

現在の会長は大谷光真・浄土真宗本願寺派前門主が務めている。私も以前に何度かパネリストとして出席した経験があるが、天理教は教団としては数年前に退会しており、私は今回はWCRP日本委員会の枠で参加した。(天理大学関係では、他にコルモス研究会議の研究会員である澤井義次・宗教学科教授が参加した。)

今回のテーマは、オウム真理教の教祖を含む幹部13人が死刑を執行されたことを受けて、「なぜいのちを軽んじてはいけないのか—宗教と死刑—」であった。

1日目は、大谷光真会長による「なぜいのちを軽んじてはいけないのか」、水谷周・日本イスラム協会理事による「いのちの大切さ—イスラームから—」という二つの基調講演が行われた。前者には弓山達也・東京工業大学教授が指定質問を行い、後者には藤山みどり・宗教情報センター研究員が各教団の死刑問題に関する情報について資料紹介を行った。

2日目は、午前の部では、初めに「戦争と死刑」というテーマの下、石川明人・桃山学院大学准教授が講演(コメンテータは村上興匡・大正大学教授)、次いで「自殺と死刑」というテーマの下、篠原鋭一・曹洞宗長寿院住職が講演を行った(コメンテータは土井健司・関西学院大学教授)。

午後の部では、井上順孝・國學院大学教授の司会の下、全体討議が行われた。この際、最初に全体を講演者4名の講演ごとに4グループに分け、それぞれ1時間ほど議論を行い、その後各グループの議論の内容が報告され、その後で全体討議に移った。私は、大谷光真会長のグループに入り、その結果を報告する役割を担当した。弓山氏の司会の下、死刑制度を宗教者としてどう考えるかという問題について議論を行ったが、グループのメンバーの宗教的背景が伝統仏教(浄土真宗本願寺派、真宗大谷派、曹洞宗)、新宗教(天理教、金光教、立正佼成会、真如苑)とさまざまであり、論客がそれぞれ自らの意見を積極的に表明し、熱心なやり取りが行われた。

「宗教と死刑」という大変重いテーマだったが、現行の法制度の是非も含めて、どの宗教の教えにも共通するいのちの尊重の思想をどう社会に訴えていくか、さまざまな角度から検討することができて、とても意義深い2日間の研究会議であった。

宗教研究会を開催(1月24日)

「金光教」における「お道」への問い

今年度の宗教研究会では、金光教国際センター所長・金光教中野教会長である河井(福嶋)信吉氏による、『「金光教」に

ける『お道』への問い」と題する発表会を行った。河井氏は、長年、「道」「お道」と表現される信仰実践や語りについて研究しており、「日本の宗教における近代化と道—天理教・金光教を事例として」(『宗教研究』69-3、1995年)、「〈お道〉として語られる〈宗教〉世界」(島藺進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ペリかん社、2004年)といったこのテーマの先駆的な論文がある。今回は、ご自身が「道」「お道」の研究に打ち込むようになった経緯と絡めながら、教団の「宗教」化という動向を取りあげつつ、金光教における「お道」のあり方が論じられた。

「道」という言葉は、多くの宗教でその教えや実践を表す際に用いられる。それは単に「宗教」が「道」にたとえられているというよりも、「道」と表現するからこそあらわとなる側面があると思われる。両者の違いについて、河井氏は次のように述べている。

「金光教」「天理教」といった「宗教」としての固有名詞は、「宗教」としての境界、内/外の区別を見えやすいものとする。……また、信仰の場面においても、「宗教」一般や他の社会制度と対峙しつつ「宗教」としていかにあるべきか」という問いを喚起することになる。

しかし、元来、そのような問いは「お道」という自己理解の場では生じることがなかった。世間の諸芸諸道各々の真理性は認識されているし、「仏道」など他の「信心」の「道」との比較がなされないわけではないが、「道」一般に関する知識にとって、「道」としていかにあるべきか」という問いを当事者が問うことはない。「お道」への「道」としての問いは、認識の対象としての問いというよりは、「道」を生きるための実践的な問いとして立てられるのであり、しかも、その「道」が「親神」やその神意を受けた「教祖」によって開示された「道」であるがゆえに、「親神」や「教祖」の語る「道」、さらにはその「道」を歩んだと信頼される人々の語る「道」との対峙においてのみ問われるからである。(福嶋信吉「〈お道〉として語られる〈宗教〉世界」『〈宗教〉再考』267～268頁)

金光教において、「本教は宗教じゃない。道じゃ」という見方があり、実際に、昭和29年の『金光教教規』や『教制審議会上申書』では、「道」として生成する世界を、教団のあり方に生かし、表現しようとしてきたという。しかし、昭和の末頃からの教団改革では、「宗教」教団としての教義や組織の明確化・近代化がすすめられた。そうした流れにあつて、あらためて「お道」の理解やそのあり方が問われているという。

発表後の質疑、および懇親会では、「お道」理解の可能性や現代日本の宗教状況などをめぐって活発な意見交換がなされた。(澤井治郎記)

『グローバル天理』
合本のご案内

2010年から2017年に出版された『グローバル天理』の合本を頒布しています。これは各1年分(12号分)を1冊にまとめ、簡易製本したものです(頒価は200円)。

研究所事務室に直接お越しいただくか、郵送にて頒布しています。

合本はご注文を受けて製本しておりますので、研究所事務室にお越しの際は、必ず事前に電話、FAX、もしくはEメールでご連絡ください。

(裏表紙に連絡先が記載されています。)